

31-1163

牛病新書に関する研究

○臼井 一城¹, 林 俊介², 松井 桃子³, 高倉 弘士⁶, 宮本 如奈⁴, 乾 真由美⁵, 畠山 有理⁷ (¹北陸大薬,²生野高,³富田林高,⁴府立農芸高,⁵東住吉高,⁶立命館大産業社会,⁷長崎大薬)

[緒論及び目的] 私たちは、江戸時代の動物治療方法に興味を持ち、特に牛の治療書である牛医書なる書写版の治療書を解読すると同時に、その書物の持つ歴史的意義を追求し続けている。その過程で、関連の動物治療書を解読しすでいくつかを報告した。今回、明治時代の牛の治療目的に翻訳された牛病新書という書物を入手した。牛を治療する目的で作られた牛病新書を通し、明治維新を経験し西洋の新たな知識が導入された時代の牛の治療に関する状況、薬品と奇抜な内容を紹介し、西洋医学への過渡期的状況を紹介する。また、江戸時代よりの薬品の秤量単位を併せて紹介する。

[内容] この書物は明治7年3月に香雲閣蔵版として、石川良信閲、柏原学而訳として著された物である。この本の原本は和欄家畜医学の教頭プロプァーニューマン氏の書き著した家畜医書第六版(1866年発行)によるものであり、陸軍一等軍医正六位 石川良信閲、静岡在住 柏原学而訳とされている。全体で95ページ、牛病新書序、緒言、目録、以下23章からなる。各章は、口中病、眼病、角症、耳症、膝頭息肉、関節腫及脛腫、竹木刺、甲関節挫傷、爪腫、爪甲症、足心悶座、折骨、*腫、肩*麻痺、腰部麻痺、*骨麻痺、創傷、腫起、乳房病、疥癬、半風、痣、尾症であり、約111の薬品が使用されている。

[結論] 本書は牛病新書巻之一とされ、外部病第一章口中病と始まっている。この他に二巻全三巻から牛病新書は構成されているが、そのうちの一つである。内容的に、使用する薬品に重点を置いていると言うよりはその症状から病を判断する為の解説が中心であると言える。牛疫拡散予防目的で全国に配置された背景があるが、当時牛の医学を学ぶ者や学びたい者がいない状況も併せて読みとれる。